

入楞伽經の識の三相説について

——如来蔵とアーヤ識の同視をめぐって——

清水 要晃

『入楞伽經』(Lankavatrasūtra 以下『楞伽』と略記)は唯識及び如来蔵思想の系列で眺める時、アーヤ識と如来蔵を同視する教理を説く点に於て注目される經典である。小稿はこの兩者を同視する思想構造を解明する一助として、『楞伽』の説く識説、特に「識の三相説」を中心にして述べるものである。

『楞伽』の識説の大様は「心・意・意識・五識」の体系で八識説を説き、一応整理された唯識の識説を知っていたものと見られる。ところで『楞伽』は勝又俊教博士、安井広済博士が既に指摘された様に「識の生住滅」「八識を現識と分別事識の二に分ける」点など他の唯識経論にない独自の識説を展開する。ここに述べる「識の三相」即ち、転相 (pravṛtti-lakṣaṇa) 業相 (karma-lakṣaṇa) 真相 (jñāna-lakṣaṇa) の三相もその一つである (LAS. p. 37)。識を三相に分けること自体は『撰大乘論』『成唯識論』に「自相、因相、果相」として三相が示されるが、今の『楞伽』に見られる「転、業、真」の三相は他に見られない。ここに於て特に三相に論及する理由は、後述する様に、この三相説が如来蔵思想と多分に類似しており、如来蔵とアーヤ識を同視する時の思想構造を推定し得ると考えられるためである。『楞伽』はこの三相を次の様に説く。

転識がアーヤ識の真相と異なるならば（転識は）アーヤ識を因としない。若し不異ならば、転識が減する時、アーヤ識も減する。然し（アーヤ識の）自らの真相の減ではない。……諸識の自らの真相は減しないが、業相は減する。自らの真相が減すれば、アーヤ識も減する。（然し）アーヤ識が減すれば、この説は外道の断滅論と差別なう。(LAS. p. 38f)

即ち、アーヤ識と転識とは不二不異であると従来の唯識説を受けながらも、転識が減する時にはアーヤ識も減するが、その真相は不滅であり、業相が生滅するのであると説く。以下この個所を Jñānāśrībhadda による『楞伽』の註釈、*Āryalankavatara-vṛtti* (影印北京版 No. 5519 以下『註』と略記)を参考にして検討してみよう。

『楞伽』に云う業相は、karma の語からも波浪として諸識が生起する時の活動（作用）を意味すると考えられる。『楞伽』は転相 (pravṛtti-lakṣaṇa) について何も触れていないが、転相は業相たる活動が転識として生起した時の相を示すものである。業相である活動が消滅すれば転識としての相は生起し得ないので、敢えて転相の説明を必要としなかったのかも知れない。ここでは不滅なるものと、生滅なるものとしての関係が重視されているので、業相と転相とは共に生滅のものとして、結果的に同一視、混同されたものと見てもよいと考えられる。『註』も転相については触れないが、「業相とはアーヤ識によつて転識とされる」「色などの境界を現する眼などの識、それらは転滅するもので転識である。それは無間を知るべき知覚で業相である」と業相は眼等の転識であると示していることは、業相と転相を混同した結果であろう。更に『註』は「垢の位

(dri mahi rim pa) にすぎない眼等の転識は速かに生滅する」と述べる。転識は業相であるとされているので、業相の生滅としての性格を具体的に「垢」と解釈する。『註』に於ては、業相は生滅の転識であり、垢と見る点から、本来あるべきものではないと云う要請のもとにあると見られる。

真相については『註』に「第一義諦であるアーラヤ識〔の真相〕は不断滅である」とあるが、真相は不生滅なものであるので、第一義諦とあつても不思議ではなく、特に真相について助けとなる解釈は見られない。真相は不生滅であり、第一義諦であり、業相が生滅の転識、垢とされるのであるから、真相は主体的な、果としての性格を有する清浄体であると見做されよう。

以上述べた様に、アーラヤ識には不滅の真相と生滅の業相、換言すれば真の面と妄の面が共に存在すること、特に真相の存在が重視され説かれている。アーラヤ識に真妄の二面を認めることは、『楞伽』独自のものでなく、唯識説に於ては認められ得るところであるが、『楞伽』は「如来蔵と名づけられるアーラヤ識」「アーラヤ識と名づけられる如来蔵」(LAS, p. 221 ff, p. 225 d) などの形で如来蔵とアーラヤ識を同視する思想を説くために、この真と妄の二面は、唯識説の云う真妄和合識なる観点と異なる意味を持ち、如来蔵とアーラヤ識を同視する時の構造の一端をなしていると考えられるのである。即ち、真相は既述の様に果として、清浄無垢体としての性格を有する不滅のものであるために、今、如来蔵との関連に於ては如来蔵の本質である法身を意味する。如来蔵は元来そこに煩惱の存在を予想する在纏位の法身(有垢如)であるので、真相それ自体では如来蔵とは云えない。従つて真相自体としては無垢如と見なければ

ならない。『註』に云う第一義諦(don dam pa=paramartha)が de bshin nîd (ll tathata) と同義である点からも、このことは肯定できよう。業相は転識であるとされるが、全体としては真相の不生滅に對して有生滅なる面を強調しており、垢なるものとされるのであるから、本来的には無なるものである。故に如来蔵と関連して見る時、この業相は、真相を法身としたことに對して、染汚相・煩惱、更にそれが本来無である点から客塵煩惱と換言することができる。

この様に真相と業相を如来蔵思想と関係させて見ることが許されるならば、三相説で示されるアーラヤ識は、当に如来蔵を意味すると考えることができる。即ち、ここに見るアーラヤ識は、真相と業相が共に存在している状態を指しているものであるから、真相とされる不滅の体(無垢法身)に、業相とされる生滅の転識、垢(煩惱)が共に存在するアーラヤ識である。故に、このアーラヤ識は有垢如である如来蔵を意味すると見做すことが可能であり、『楞伽』に於ける如来蔵とアーラヤ識の同視が、アーラヤ識(唯識説)の有為法を中心に転識得智とする、所謂の非連続的論理構造から、無為法を論理の中心に置く、如来蔵の連続的な構造へと変化、接近する形でその一端を推定し得るのである。(註記略)

『楞伽』に於ける如来蔵とアーラヤ識の同視については、拙稿「楞伽經の如来蔵思想について」(大崎学報第二十八号)に、如来蔵思想を基盤として、如来蔵とアーラヤ識の両者が共に接近する形での同視である旨を述べておいたので、併せ参照していただければ幸いである。小稿はそのアーラヤ識から如来蔵とする部分の若干の加筆である。